

昭憲皇太后大礼服研究修復

復元プロジェクト

国産の服地を用いた日本人の手によると思われる初の皇后の大礼服。その制作過程の解明と保護の問題に取り組む現状を報告。

昭憲皇太后の大礼服をめぐって

私も中世日本研究所が進める「尼門跡寺院修復プロジェクト」は、かれこれ二十年近くに渡り、(公財)文化財保護・芸術研究助成財団よりご支援ご協力をいただいております。長く続いていまして、それだけ多くの宝物類が、文化財の赤字である財団の救いの手を待っているからです。まだまだ多くの宝物類があり少しでも未来へ残していけるよう、これからも取り組みたいと思っております。



昭憲皇太后御尊影(鈴木真一・丸木利陽撮影)

この度は、「昭憲皇太后大礼服研究修復復元プロジェクト」という、より大きなプロジェクトを進めています。長年、修復のみでなく研究の推進、また世界の研究者との交流など、多岐にわたり取り組みたかった懸案事業です。二〇二〇年は明治神宮鎮座一〇〇年祭の記念の年でもあり、明治神宮との協力関係のもとプロジェクトを行なっております。

百年ほど前、明治四十四年孟夏(初夏)、明治天皇の皇后(昭憲皇太后)よりこの大礼服が天聖寺門跡へ下賜されました。それより二十年余り前、皇后が新年拝賀の儀式などでお召しになられた最も格式ある礼服の「ポティス」と長い「トレイン」です。大きな長方形のトレインは拝領後、二枚の打敷に仕立て直され、大聖寺において特別な遠忌法要の際の祭壇に使われました。当時の日記には「打敷は洋服で」飾ったと記されています。おそらくこの皇后のトレインのことだったと思われまます。

しかし、豪華な刺繍部分の盛り上がった打敷は本堂内を荘厳するには少々使いにくかったのかもしれない。その後、大礼服

解き明かされてゆく謎

昭憲皇太后の大礼服は、今では三着のみ現存していることが知られています。その中でもこの大礼服はデザインや素材、技法などから、明治二十二年(一八八九)から二十三年頃の最も古いものとされています。洋装は外交的な必要性からで、初代内閣総理大臣であった伊藤博文(一八四一〜一九〇九)の意向で、近代国家として欧米と対等に外交を進める上での決断でもありました。この大礼服の制作時期は、***大日本帝国憲法発布式の頃で、薔薇文様の大礼服をお召しになる皇后の御真影写真の撮影時期とほぼ同年代に当たります。

皇后は洋装の着用に際し、明治二十年に洋装を奨励する「思召書」を下されました。皇后は、国産の服地を使用するようにと記され、洋装を奨励されるにも日本の発展、産業の振興にと心を配られた内容でした。

皇后はご自身が下された思召書で述べられたことを、この大礼服で示されたのでしょうか。一



生地部分



刺繍部分

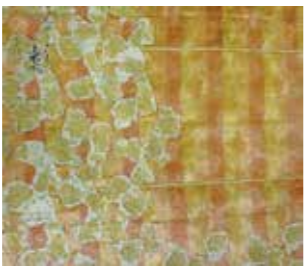
見、大聖寺の大礼服は全てにおいて西洋風に見えます。パターンは、日本の花ではなく、特徴あるバラの模様です。刺繍は、欧米の宮廷服で流行していた金属製のコイル、スパンコールなどを使用しており、当時日本にはこの材料はありませんでした。また初期の洋服は外国で仕立てられたという記録もあります。

研究の成果から、大礼服製作時が少しず

つ判明してきました。二〇一九年、いよいよトレインの初期調査と解体が始まり、さらに謎が少しずつ解き明かされました。裏地には金属刺繍を補強する反故和紙が使われていたことがわかり、墨で書かれた「明治十一年」の日付もはっきりと見えました。これは日本で刺繍が行われたという確かな証拠です。しかし、これだけでは生地や仕立てについて特定することはできません。

詳しく調べるため

に、海外の染織や修復、宮廷服などに詳しい専門家と、二〇一九年秋に何度か研究会を開き、色々なことがわかってきました。ポティスの内側やポーニングはヨーロッパの形と若干異なります。ドイツの専門家が縫い糸を調べると、ポティスがヨーロッパで作られていないという明確な証拠が示されました。当時ヨーロッパで使用されていた糸はしっかりとした三本の撚り糸ですが、このポティスの縫い糸は二本の糸が緩く撚られたものが使われていました。



刺繍裏地の写真

ヨーロッパの多くの生地も丹念に調べましたが、どれも当てはまらないことがわかってきました。織りの組織は似たようなものがあるのですが、文様はどれも似たものがないのです。生地幅も五十八センチとイタリアなどの生地としては巾が狭く、デザインもどこかしっくりと当てはまりません。一方、日本の染織専門家の人たちは、これは当時新しく日本で導入され日本仕様に改造され

は展覧会に出展のため、元のトレインに仕立て直されました。今まで数度しか展示されていませんが、糸は経年劣化し、折り目やトレインの端など、生地に負荷がかかる場所でかなり傷みが進んでいます。



大礼服全体図



明治皇后から拝領した大礼服のトレインに書かれた墨書

たジャカード織機では織ることができなかったといえます。どこで織られたかを確定するには、やはり糸そのものをもう少し良く観察することで、答えをひも解くことができるかもしれません。

皇室の伝統の中で

本年秋には明治神宮鎮座一〇〇年祭記念の国際フォーラムが三日間に渡り開催されます。この昭憲皇太后大礼服の研究修復のセッションも十月二十四日に行われる予定で、国内外から染織修復や十九世紀欧米の宮廷服の専門家が集まります。この大礼服から見えてくるものをさらに解き明かしたいと思えます。

修復事業は、修復に止まらず、その時代を語る大事な存在である文化財を守ることであり、その重要さが見えてきました。この度も、嬉しいことに多くの海外の専門家が協力してくれています。このような協力が得られるのも、この大礼服がスペシャルであることを自ら発信しているからだと感じます。

昭憲皇太后は激動の時代に日本赤十字の活動を推進され、ご下賜金により設立された昭憲皇太后基金は代々受け継がれ、今なお世界中の活動を支えています。(公財)文化財保護・芸術研究助成財団の活動は、まさしく文化財の赤十字です。昭憲皇太后が再興されたご養蚕は、赤十字と同じく、代々の皇后に受け継がれています。この伝統は、上皇后陛下美智子さまのご養蚕への思い、赤十字への思いへとつながり、そして、当プロジェクトへのご理解ご支援へとつないでいただきました。この脈々と繋がってきた物語がこれからも続くよう、手遅れになる前に今の時代にできることを考えて、事業に取り組みたいと思います。これから多くの文化財の声を聞き取り、その声を活かせるように数多の文化財が長く護られて行くことを願っています。



中世日本研究所・所長 昭憲皇太后大礼服研究修復 復元プロジェクト実行委員長 モニカ・ベーテ

※ポティス：15世紀の西欧で登場した、体にぴったりとした腰の上までの長さの女性用の衣服。 ※トレイン：ドレスの後ろに長く引きずる裾の部分のこと。 ※明治22年。